村上龍青少年主人公作品研究

——主体性確立で危機を乗り越えて

徐明真 著

知识产权出版社
全国百佳图书出版单位

村上龍 青少年主人公作品研究

——主体性確立で危機を乗り越えて

徐明真 著

知识产权出版社
全国百佳图书出版单位

内容提要

村上龙是代表20世纪70年代以来日本文学水准的著名作家，日本当代文坛领军人物之一，因其对现代社会敏锐的观察、深刻的剖析、积极的介入而备受瞩目。本书为中国国内首部村上龙作品研究专著，论及村上龙文学创作的原初风景、作家30余年创作历程中具有共通性主题的多部代表作品。本书以父权危机问题为切入点，通过细致的文本分析，揭示作家村上龙对第二次世界大战结束以来日本社会父性权威缺失及由此导致的社会整体价值观危机问题的持续关注，重点考察作为诸篇作品共通性主题的价值观危机问题与现代日本社会特质的内在联系，提供深入了解现代日本社会问题的新视角，并评述村上龙青少年主人公作品中蕴含的现实性人文关怀及其对当下处于转型期的中国社会的借鉴意义。

责任编辑：冯　彤

图书在版编目（CIP）数据

村上龙青少年主人公作品研究：日文 / 徐明真著 .—北京：知识产权出版社，2013.7

ISBN 978-7-5130-2148-7

Ⅰ.①村… Ⅱ.①徐… Ⅲ.①村上龙—小说研究—人物研究—日文 Ⅳ.①I313.074

中国版本图书馆 CIP 数据核字（2013）第 163161 号

村上龍青少年主人公作品研究——主体性確立で危機を乗り越えて

徐明真　著

出版发行：知识产权出版社

社　　址：	北京市海淀区马甸南村 1 号	**邮　　编：**	100088
网　　址：	http://www.ipph.cn	**邮　　箱：**	bjb@cnipr.com
发行电话：	010-82000860 转 8101/8102	**传　　真：**	010-82005070/82000893
责编电话：	010-82000860 转 8386	**责编邮箱：**	fengtong@cnipr.com
印　　刷：	知识产权出版社电子制印中心	**经　　销：**	新华书店及相关销售网点
开　　本：	720mm × 960mm　1/16	**印　　张：**	18.25
版　　次：	2013 年 7 月第 1 版	**印　　次：**	2013 年 7 月第 1 次印刷
字　　数：	500 千字	**定　　价：**	45.00 元

ISBN 978-7-5130-2148-7

出版权专有　侵权必究

如有印装质量问题，本社负责调换。

序　言

在日本当代文学（日本文学中没有“当代文学”的划分，一般把明治维新以后的文学称之为“近代文学”，或按年号称之为“明治文学”、“大正文学”、“昭和文学”）作家中，就其作品主题的深刻性、对现实社会的敏锐观察、深刻剖析、积极介入和深入思考等诸方面而言，村上龙是完全可以和村上春树比肩的，有重要的代表性。

村上龙的作品无不反映出重大的社会主题，其成名作《无限接近透明的蓝色》、第一短篇集《悲伤的热带》等作品，以美军占领下的基地之城与热带岛屿为舞台，反映了日本嬉皮青年与热带岛屿少年共同面对的传统/本土父权与异文化新父权的矛盾和激烈的社会文化冲突，凸显了父权扭曲带给现代社会的纷纭复杂的种种问题。

战后日本在经济高速增长，实现现代化以后，整个社会开始面临价值观危机，破坏欲、人格障碍、少年犯罪、少女卖春等社会问题泛滥。村上龙以强烈的社会责任感，创作了《投币式寄存柜婴儿》、《昭和歌谣大全集》等“破坏系列”作品，深刻挖掘出现这一系列社会问题的深层原因和社会整体价值观危机对青少年一代的影响。

进入20世纪90年代以后，村上龙在继续关注破坏性主题的同时，开始在与破坏截然相反的建设性方向探求冲出现实闭塞感的可能性。其“KYOKO系列”和《希望之国的出埃及记》、《最后的家庭》三部作品，作为普遍意义上的文学实践，主张确立主体性，实现精神自立，摆脱日渐失效的旧价值观、旧体制的束缚，试图将现代人从价值观危机当中解救出来。体现出村上龙文学深切的现实关怀，具有普遍的社会意义。

村上龙文学的主题是深刻的，对社会、对人、对事物的观察是敏锐的。

而本书的作者徐明真博士对村上龙文学的解读、分析和思考同样是深刻和敏锐的。明真跟我读博士多年，睿智、勤奋、刻苦，具有很强的问题意识，理论功底扎实。在学期间发表了多篇很有分量的学术论文，已经成长为吉林大学日本语言文学系教授，并开始招收和培养硕士学位研究生，是我的博士生中较有成就的年轻学者之一。

本书的材料积累很丰厚，早从十年前开始，明真在日本留学、讲学期间就关注村上龙及其文学创作，并循序渐进地仔细研读原作和相关研究文献，最终决定以该研究作为博士学位论文题目。

本书以村上龙代表作中多部青少年主人公作品为研究对象，运用文本解读和文本与社会历史背景相结合的方法，重点考察了作为诸篇作品共通性主题的价值观危机问题与现代日本社会特质的内在联系。立题新颖，立论有据，观点深刻且富有思辨性。作为我国如此较全面、深入地研究村上龙及其文学创作的第一位研究者，填补了我国该研究领域的空白。对我国的日本当代文学研究具有重要的理论意义和学术价值。书中论及的对转型期中国社会借鉴意义的思考，也具有很强的现实意义和启迪作用。

经过艰苦的努力，这部饱含着明真多年心血的著作即将与读者见面了。作为老师，我由衷地为她高兴。或许还是刚露尖尖角的一株小荷，但从字里行间不难看出，已经孕育了绽放的能量。希望明真在研究的道路上不断前行，为我国的日本文学研究贡献更多更好的成果。

我和全国的同行一道，热切地期待着。

是为序。

宿久高

2013 年 6 月 30 日

于吉林大学南校樵夫斋

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

凡　例

1. 小説作品に関しては、長編は『　』で、短編は「　」で表わした。

2. 映画作品・映画シナリオに関しては『　』で表わし、その前に「映画」「映画シナリオ」で限定して表わした。

3. エッセイ・対談・先行研究などに関しては、題名は「　」で表わし、掲載誌紙・所収書名を『　』で表わした。

4. 小説・エッセイ・対談・先行研究からの引用は「　」で表わし、強調する言葉は＜　＞で表わした。

5. 引用文中の作品タイトルは、ジャンルを問わず表記はすべて原文のままにした。

6. 本文中の紀元は西暦で表わし、表記はアラビア数字を使った。ただし、引用文中の紀元は原文のままにした。

7. 参考文献は全編の終わりにまとめて記した。ただし、段落ごとの引用は引用文の後に出典を記し、参考文献に列しないことにした。

8. 引用文の中の引用文は、文献によって、「××××「○○」××××」「××××＜○○＞××××」「×××× 〝○○〟 ××××」など異なる表記となっているが、あえて統一させずにすべて原文のままにした。

目 次

序論……1
一、村上龍、時代とともに生きる作家……1
二、村上龍研究概観……3
三、論題の選択をめぐって……7

第一章 『限りなく透明に近いブルー』:村上龍文学の原風景 …… 11
プロローグ　原風景への疑問…… 11
第一節　観念作としての処女作…… 13
第二節　基地の街という舞台…… 17
第三節　混血という運命…… 20
第四節　切ない回帰志向…… 24

第二章　村上龍原風景の変容を巡る一考察 …… 30
第一節　基地原風景のずれ…… 30
第二節　アメリカという参照系の変容…… 35
第三節　史実的記憶と想像的構築の間…… 41
第四節　村上龍原風景言説へのアプローチ…… 45

第三章　反抗と渇望:『悲しき熱帯』における父権葛藤 …… 52
第一節　福生に遠いようで近い熱帯…… 52
第二節　父性的権威、その根強さと重要さ…… 56
第三節　基地の街と熱帯の島の父権葛藤…… 60
第四節　少年の成長とアメリカ像の薄らぎ…… 63
インタールード　まとめⅠ…… 68

第四章　キクの宿命：歪んだ父権に導かれて破壊へ
——『コインロッカー・ベービーズ』の問題性 …… 73
第一節　勝負作、冒険作、自信作、そして評判作…… 73
第二節　近代都市文明破壊寓話…… 77
第三節　父なき子の父性憧憬…… 83
第四節　歪んだ父権・破壊の宿命…… 91

第五章　美少女もオタクも破壊へ向かう：普通の子の反抗
——アネモネや『昭和歌謡大全集』が示す普遍性 …… 97
第一節　価値観危機、豊かな貧乏…… 98
第二節　アネモネの反抗：破壊への共鳴…… 101
第三節　歌謡曲で歌われる寂しさ…… 107

第六章　引きこもる少年：失われた時代の寂しさ——『共生虫』にいたるまで… 117
第一節　少年非行の社会的根源詮索…… 117
第二節　村上龍の神戸事件言説…… 121
第三節　インターネットと引きこもり…… 128
第四節　『共生虫』：引きこもる寂しさ…… 132

第七章　普通の女の子の軌道逸脱
——『トパーズ』系諸作における父・娘関係 …… 143
第一節　他者を探す女達…… 144
第二節　身体毀傷に見られる否定の哲学…… 150
第三節　痛み：存在感と勇気の確かめ…… 157
第四節　大切だと感じたモノ…… 167
インタールード　まとめII…… 173

第八章　『KYOKO』：キューバに憑かれる妖精譚 …… 178
第一節　KYOKO・キョウコのバリアント …… 178

第二節　基地の街からの出発…… 182
第三節　キョウコの意志…… 189
第四節　主体性：キューバが意味するもの…… 195
第五節　希望と再生の妖精譚…… 199

第九章 『希望の国のエクソダス』:地上ユートピア創世記…… 206
第一節　『希望の国のエクソダス』の創作動因…… 206
第二節　何故、中学生なのか？…… 211
第三節　少年たちは、希望の国へ…… 216
第四節　ユートピアの受け止め方…… 223

第十章 『最後の家族』:軟着陸する人間劇 …… 234
第一節　最小の共同体としての家族…… 234
第二節　引きこもりからのエクソダス…… 242
第三節　家族の解体と個人の自立…… 248
エピローグ　まとめⅢ…… 254

終章(結論にかえて)…… 257
一、本論のまとめ…… 257
二、今後の課題の展望…… 261

参考文献…… 264

后 记 …… 279

序　論

一、村上龍、時代と共に生きる作家

1970年代以来の日本文学を考察する際、村上龍は避けられないばかりか、軽く見ることさえ許されないような実力派的存在であることは、今日になって既に説明するまでもなく自明のことだと言える。1976年に衝撃的な問題作『限りなく透明に近いブルー』をもってデビューして以来、村上龍は、30数年にわたって文筆活動を続けてきて、膨大な数の創作（小説を中心に、映画シナリオ・エッセイ・対談ほかいろいろ）を残している。もちろん、還暦を迎える今になっても全然衰える様相を呈せずに書き続けている。また、映画監督をはじめとして、ラジオDJ、テレビトークショーホスト、ミュージックプロデューサー、スポーツリポーター、ポップアーティーストなどをして、マスメディアの諸分野においても大いに活躍してきた。さらに、マスコミや経済などの分野にも進出し、その幅広い関心点と旺盛な活躍ぶりで人々を驚愕かつ感心させてきた。

小説のジャンルに限って言っても、その題材の広さや主題の重量感によって広範な反響を呼び起こし、長いこと話題にされてきたものをたくさん書いている。日本人にとって回避することのできないアメリカ文化受容意識（デビュー作『限りなく透明に近いブルー』ほか）から、都市社会の負う閉塞感及び閉塞から抜け出そうとする莫大な破壊力（『コインロッカー・ベービーズ』、『昭和歌謡大全集』ほか）、都市社会の病症を極端な形で暴いている風俗業点描及びそれに託されている思想的・社会的メタファー（『トパーズ』ほか）、長いこと暗黙の世界に抑えられてきた

一部日本人の戦後日本憎悪・ファシズム憧憬情緒（『愛と幻想のファシズム』、『五分後の世界』ほか）、トラウマ（trauma）＝心的外傷による人格障害及びその社会的根源・影響（『ピアッシング』、『オーディション』ほか）、そして、援助交際（『ラブ＆ポップ』ほか）、引きこもり（『共生虫』ほか）、集団不登校（『希望の国のエクソダス』）、家族解体（『最後の家族』）などの、価値観多岐にわたるインターネット時代のさまざまな新しい社会問題に至るまで、村上龍が関心を寄せているテーマは実に枚挙にいとまがない。

こうして、作家村上龍は、デビュー30余年来、一貫してその鋭敏な触角をさまざまな重大かつ深刻な社会問題に働きかけ、それを自作の題材にして追究し続けてきた。しかも、その社会問題の文学的扱い方が即時的でありながらも、表面にとどまる一時的なセンセーショナルなものではなかった。同時代の日本文学者の中で、村上龍ほど精力的で常に現実社会の先端的な問題に機敏にリアクションしている作家はそれほど多くない、と言えよう。村上龍の書いたものは、文学作品でありながら文学作品にとどまらない。日本人の読者にとってもそうであるが、とりわけ外国人の読者にとっては、戦後日本社会が歩んできた歴程を考察する場合、より実感をもってそれに接近し把握しようとするために大いに役立つ＜参考書＞だと言える。もちろん、村上龍言説はあくまでも戦後日本社会を巡る一説に過ぎず、それがすなわち戦後日本社会解説の定論だ、ということはない。しかし、一方、読者の受容の重要性が広く認められるようになっている現在、村上龍文学は激賞を受けたり酷評を浴びたり共鳴を集めたり文句を言われたりするが、無視だけはされていなかった、という事実自体は、既にその創作の社会的影響力の強いことを十分に説明しているのではあるまいか。この意味において、村上龍文学は、いわば戦後日本社会が直面してきた、あるいは今もなお直面し続けているさまざまな重大かつ深刻な問題が、極めて感性的な形式で記されている、史的価値の高い＜備忘録＞のようなものだと言えよう。そんな村上龍は、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

まさに時代と共に生きる作家だと言える。そして、その文学についての研究は、1970年代以降の日本文学を考察する際、重要な課題の一つに数えられるとも言えよう。

二、村上龍研究概観

豊かなる作品世界を持っている村上龍という作家についての研究は、当然なことだけれども多様な視点から為されている。作家デビュー30余年来、日本においては村上龍文学に関する研究が多く行われてきた。内容によって、大まかに下記の三種類に分けていいのではないかと思われる。

1　選評コメント・書評・対談・インタビューほか

まずは、群像新人賞・芥川賞選考委員たちによる選評コメントや、文芸時評としての書評（作品合評）・対談（鼎談）・インタビューなどに見られる、評論家・作家たちが村上龍とその作品について発したさまざまな発言である。デビュー作をはじめ、反響の大きい代表作品が考察の中心となっているものが多くあり、そして、迅速かつ敏感に作品の要所を掴んで簡単でありながら鋭く突いたものが多くあった。永井龍男や瀧井孝作のように授賞そのものに保留的意見を示す方もいたが、「抜群の資質」（吉行淳之介）とか、「本人にも手に負えぬ才能の汎濫」（中村光夫）とか、「作者の資質というものを感じさせられる久々の作品」（井上靖）とか、当時24歳の若さだった作者の作家としての資質に対しては委員諸氏ほぼ全員うなずいたらしい。[1] 作家論に傾いた芥川賞選考に比べて、その2ヶ月前に行われた群像新人賞選考委員たちの選評は、技巧・手法的特色によって反映されてきたテクニック的資質に重心をおいたと言えよう。「説明的な匂いを全く拒否した会話」の珍しさ（井上光晴）、「いやらしそうでいやらしさをおぼえさせぬということは、かえって清潔であるばかりか、積極的な意図がある」表現態度（小島信夫）、「つぎつぎととぎれもなく奔出してくるその持続性と、なんらのいや味も誇張もなくセックス

を描く平静性」、そしてそこから見る「冷静な反省力と構成力」（埴谷雄高）など、テクストに充満している細かいイメージの描写に見られる作家的才能に並々ならぬ注目を寄せていることがわかってくる。[2] ほかに、「感覚と風俗を超える」（饗庭孝男×坂上弘）、「読書鼎談　村上龍『コインロッカー・ベービーズ』」（森敦×三木卓×宮内豊）、「セックスと戦争」（落合恵子×村上龍）、「存在の耐えがたきサルサ」（中上健次×村上龍）、「“自閉の時代”を生きる」（三浦雅士×村上龍）、「キューバ・エイズ・六〇年代・映画・文芸雑誌」（柄谷行人×村上龍）、「映画とモダニズム」（村上龍×浅田彰）、「〝現代〟のエッジを行く」（池澤夏樹×村上龍）、「挑発するポップの力――『村上龍自選小説集』をめぐって」（村上龍×清水良典）などの鼎談・対談・インタビューなどにも、「セックス」「ヒッピー風俗」「基地の街」「アメリカ」「六〇年代」「自閉」「脱出」「共同体」「危機感」といった村上龍文学キーワードとでも言うべき話題をめぐる豊かな情報が含まれている。この種の文献は、体裁の形式のためか、話の重心などが途中で変わることもあり、いつも論理よく運ばされているわけではないが、話題そのものが幅広い分野にわたっているし、情報量もとても豊富なので、村上龍研究には欠かせない貴重な資料だと言わねばならぬ。

2　文芸評論・研究論文ほか

次は、各学術雑誌、文芸雑誌、新聞の文芸版などに登載されている、村上龍文学についての文芸評論や研究論文などである（雑誌特集や発表後叢書などに収録されるようになったものも含む）。この種の文献は、量的に多いし、触れる課題も幅広いので、一括的にまとめることは難しい。そのうちの、特に重要だと思われる研究成果を大まかに整理してみて、共通的な特色について簡略的に言ってみれば、村上龍文学に関する文芸評論や研究論文は、デビュー作『限りなく透明に近いブルー』をはじめとして、『コインロッカー・ベービーズ』、『トパーズ』、『だいじょうぶ　マイ・フレンド』、『愛と幻想のファシズム』、『ヒュウガ・ウイルス』、『KYOKO』、

『共生虫』、『希望の国エクソダス』など十数編の代表作品に集中していることがわかってくる。論題としては、上記諸作の主題をめぐる研究がかなり多いが、もっぱら文体・手法の視点からの考察もある。村上龍研究の基本文献として重要視されているいくつかのものを挙げてもう少し詳しく紹介してみれば、たとえば、柄谷行人の「想像力のベース」(『村上龍自選小説集1』解説）は、村上龍文学の原点である「米軍基地」の深層を文化受容のコンテクストの下で探って、重要なのは、村上龍が人間の存在形態のベース（基礎）を基本的にベース（軍事基地）に見いだそうとした、ということを掲示した。また、小森陽一の「基地・戦争・欲望のヴィジョン」（『國文学』1993年3月号）は、村上龍言説にある「基地」のイメージの変貌から着手して、『だいじょうぶ　マイ・フレンド』『愛と幻想のファシズム』など初期作品に見られる政治意識に考察を与えた。ほかに、作家・評論家の松浦理英子は、女性ならではの問題意識と鋭敏な観察を十分に生かして、その「非＝男性作家としての村上龍」(『群像日本の作家29 村上龍』小学館1998)の中で、「日本近代文学における最大の女性問題」すなわち「女性の話しことば」の問題という立場から、村上龍短編集『トパーズ』を「抑圧された日本語の中でもとりわけ抑圧された女性の話しことばを言文一致的な語りの内で解放する」偉大なる仕事として読んだし、「トパーズⅡ」と副題されている長編『ラブ＆ポップ』を、「舞台を吉原から渋谷に移した平成版の『たけくらべ』」とまで語った（P18、19、20)。そして、松浦理英子がそれに不満を示した、村上龍の「マチズモ」の特質が割りと端的に表わされている『コインロッカー・ベービーズ』を課題にして、三浦雅士は「村上龍または自閉と破壊」(『海』1981年2月号）の中で、その主題を、現代都市社会が臨んでいる最も厳重なる問題の一つである現代人のアイデンティティ（自己同一性・帰属意識）の喪失による「自閉」及びそこからの最悪突破手段の「破壊」に帰して、鋭く突いた。

3　論著

そして、三番目に挙げられるのは、村上龍文学全般を考察対象にして、作家論・作品論の立場から村上龍文学について総合的な研究を進めてきた論著である。出版順を追って言えば、村上龍が作家デビュー間もなく刊行された野崎六助の『リュウズ・ウイルス　村上龍読本』（毎日新聞社 1982）は、著者自身が、「正確なスタンスを測ったうえでの「作家論」のショットではない。狙撃の足場を確保する余裕などはなかった。もちろんマト自体も静止などしていない。動きつつ揺れ動くいくつものショットを捉えた。したがって全作品の吟味という方向はない。」（P237）と述べたように、とても感性的な作品論であった。それに対して、陣野俊史の『龍以後の世界――村上龍と言う「最終兵器」の研究』（彩流社 1998）は、各小説のポジションや、小説の要素となるスポーツ・音楽及びその他の具体的イメージの象徴性などについて詳しく論述を展開して、村上龍文学における観念的なものを根気よく追究してきた。南雄太の『村上龍作家作品研究　村上龍の世界地図』（専修大学出版局 2007）は、サブタイトルに示されているように、複数の村上龍代表作の地理的舞台及びそのメタファーという独特な視点に立脚して、「アメリカの相対化」という課題に臨む際の日本人のアイデンティティ意識、「対立」から「融合」「共生」への可能性の探究、共同体の理想図の想像といった現代日本社会の重要課題がどのように展開されて模索されてきたかについて、綿密な考察を試みてきた。黒古一夫の『村上龍　「危機」に抗する想像力』（勉誠出版 2009）は、「社会性」という立場から村上龍文学を総合的に把握することを目指している力作だと言える。サブタイトルに明確に掲げているとおり、村上龍文学を現代日本社会の「危機」に抗する想像力の産物だと位置づけて、喪失感・絶望感、そしてそれによるカリスマ（Charisma）待望・戦争憧憬意識、現実に反発する狂気的な破壊衝動、理想郷への脱出熱望といった課題をめぐる展開を中心に、作家村上龍の創作意識及びその代

表作の得失について論じてきた。

4　中国における村上龍研究事情

このように、作家村上龍がデビューして30余年経ち、その文学に関する研究は日本においては盛んに行われてきた。一方、わが中国においては、近年日本文学の紹介・翻訳・研究が盛んになってきたにもかかわらず、残念ながら、村上龍文学に関するそれはまだ不十分な状態、いや、ほとんどやっと動き出したという状態に過ぎないのである。台湾では、村上龍文学の翻訳・紹介は1980年代にさかのぼることができるのだが、大体商業出版のルートで行われていたもので、村上龍はベストセラーライターとして扱われてきて、長い間アカデミックな研究分野には入れなかった。本土では、さらに遅れて、2000年代に入ってようやく正式的な村上龍翻訳がなされるようになってきたが、これまで刊行された作品数は10点になっておらず、学術雑誌で検索できる研究論文も10数編に過ぎなかった。そして、数少ない研究成果の中でも、研究対象・研究課題の単一化傾向が問題となっている。個別作品（たとえば『限りなく透明に近いブルー』）に関する類似的な結論が繰り返されいて、全面的な作家評価や総合的な作品研究はあまり見られないのが現状である。

三、論題の選択をめぐって

論題選択をめぐって、幾度も自分で自分に聞いてみたことがある。「なぜ村上龍なのか」と。理由はいろいろ挙げられるが、自分にとって最も決定的な理由は下記の三つではないかと思ってならない。

その一、前述してきたように、村上龍は時代と共に生きる作家であり、その文学創作は、現代日本社会の歩み・あり方や、現代日本人の国民的意識・個人的意識を理解するための豊かな情報を、彼独自の感性でわれわれに提供してくれていると言える。だから、村上龍文学に関する系統的な研究は、現代日本社会・日本人に対する認識・理解を深めるために

大いに役立てるものだと堅く信じている。

その二、社会体制、国内事情などがそれぞれ異なるにせよ、村上龍文学の扱う現代社会の諸問題は、われわれにとっては決して無関係なものではない。日本社会がかつて臨んでいた、あるいは現に臨んでいるさまざまな問題は、われわれがおかれている現代中国社会、殊に改革開放政策が施されて以来の中国社会にとっては、他人事どころか、われわれも既に直面している、またはこれから直面せねばならぬような問題が多いのである。村上龍文学はわれわれにとって、いわば他人の経験をわが身に照合して教訓を生かすのに値する＜参考書＞らしきものだと思う。

その三、村上龍文学は、われわれにとって貴重な＜参考書＞であるにもかかわらず、前述したように、わが中国においては、それについての系統的な研究は未だあまり展開されていない。こういう現状を非常に残念に思って、それならば、及ばずながらも、自分の任務として引き受けて、先行研究の成果を踏まえたうえで着実な仕事をして、この価値ある事業に尽力しようとする願望に囚われるようになった。これこそ課題選択の最も直接的な原動力と言ってもいいではないかと思う。

研究価値の面から言えば、上記三点の中でも、一番目の、村上龍文学の豊かな社会性という点が論題選択の最も基本的な理由となっているのである。このような視角から村上龍文学を考察してみると、注目せねばならぬことが一つあると思う。それはつまり、作者が「あらゆることに関心を持ち」[3]、「挑戦者の感覚を持続」[4]しつつ創造してきたこの長大で豊富な＜備忘録＞あるいは＜参考書＞は、その題材も文体も作風も千変万化であるにもかかわらず、メーンテーマにいたっては、各作品は内的につながりを持っており一つの渾然たる世界を成している、ということである。作家本人は、かつて自分の多変を謙虚に「新人作家みたい」で「脈絡が全然ない」[5]と述べたことがあるが、脈絡がないのは表層だけのことで、内的にはむしろ万本の矢が一つの不変なる的に射ているよ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com